

# 津軽地方における都市の商店街に関する地理学的研究 —弘前市・五所川原市・黒石市について—

三上山 京 子

## <はじめに>

都市の発展は、複雑な諸要素が相互に働いてなされるものであるが、それは、商店街に具現化される。そこに、都市を見るなら商店街を見よ、という言葉も出てくる。つまり、都市の規模拡大、発展につれて、商店街の充実、商店規模の拡大と、取扱商品の総合化が行なわれ、従来の零細な商店は、対抗策としても専門化せざるをえなくなり、そこに業種別の構成が当然変化してゆく過程が生まれる。筆者は、津軽地方という、狭い地域に立地している弘前市・五所川原市・黒石市の三市において、その商店街を主として、店舗構成による分類を行ない、それを比較して、商店街の発達状態、特徴などを考察し、津軽地方に占める三市の地位をも、併せ考えてみたい。むろん、形態のみをもって、商店街の実態を把握するには不十分であるが、景観上とも一致する形態分類は、商店街の充実さや都市の発展状態を知る際の有力な指標となりうる。

## <本論>

### 1. 調査方法

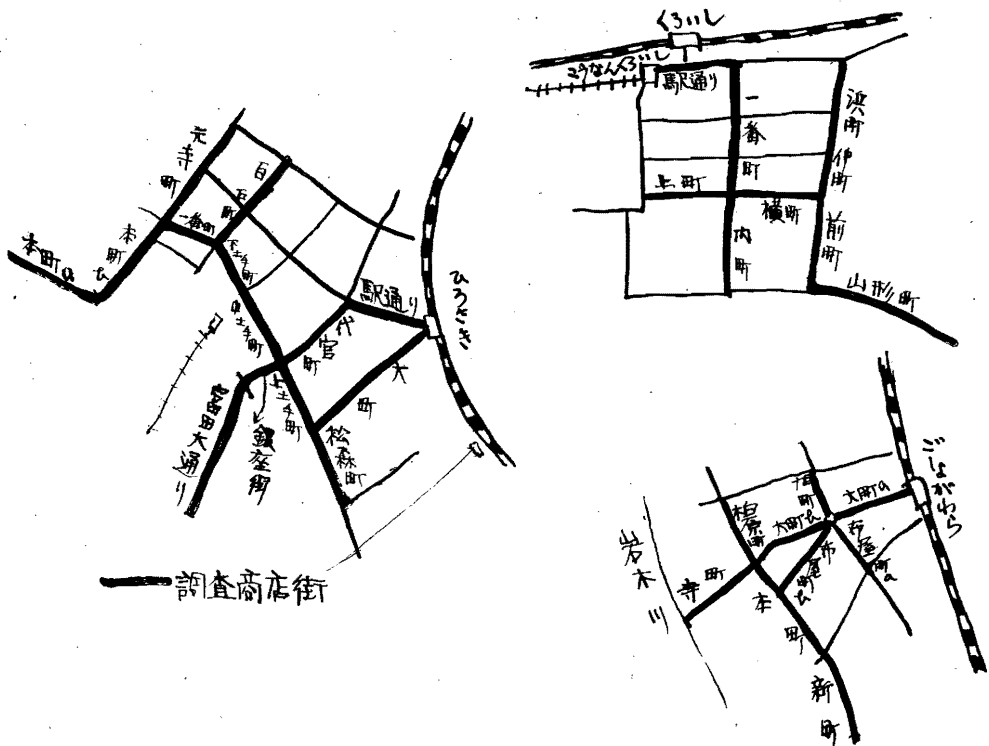
その都市において路線地価が最高を示し、かつ、外観としても都市の中心として連続する通りを中心商店街として、周辺部に見られる通りを周辺商店街とした。

その長さは、おおむね道路の切断で決まるので取り上げた商店街の数も名称も行政的なそれとは一致しないものもある。弘前市14、五所川原市9、黒石市8の商店街を対象とし、各々の商店街毎に、全建物の業種別店舗構成を一軒毎に調査した。(才1図参照)

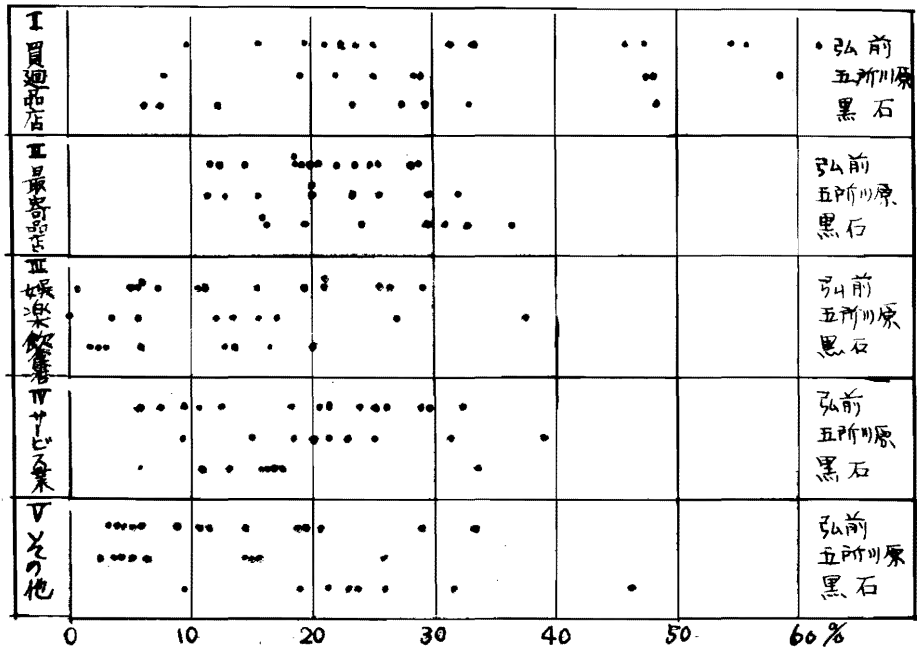
### 2. 三市の概観

弘前市の昭和40年国勢調査での人口は、15万人で、既に才一次産業人口は、40%を割り、才三次産業人口がそれに代り、消費・文化・産業ともに津軽地方の一大中心都市である。五所川原市・黒石市は、共に昭和29年の市制ブームの中で生まれた新市で人口は、それぞれ4.7万人、3.9万人で、旧三市の弘前市とは格段の差がある。才一次産業人口は、五所川原市が56%、黒石市が51%で、まだ農業を、基盤産業とした農村的色彩の濃い都市といえる。三市の最近5ケ年の人口動態は、いづれも減少、又は停滞しており、これは現代の日本の都市化現象の中の地方都市の両極分解過程にあるといえる。但し、五所川原市の、同じく40年の市住民登録によると5万人で最近5ケ年は、少しであるが増加している。国勢調査とは3000人位差があるがこれは「出稼ぎなどによって一時的に住居を移している者が、非常に多いた

才Ⅰ図 三市の市街図概略図



才Ⅱ図 要素毎の割合分布図



めと思われる」(「ごしょがわら」)

人口は減少、又は停滞しているが、世帯数はいずれの都市においても増加しており、購買力を直接、弱めることには関係がなく、むしろ購買力を高めるわけであり、これは、商店街を繁栄させ、商店数や年間販売額が、年々増加していることからわかる(オ一表参照)

オ1表 三市の商店数及び年間販売額

単位 千円

地 域	昭 和 3 7 年		昭 和 3 9 年			
	商店数(%)	年間販売額(%)	商店数(%)	増減率(%)	年間販売額(%)	増減率(%)
青 森 県	23705 (100)	20208 (100)	24802 (100)		(100)	21.6
弘 前 市	3031 (12.8)	2841 (14.1)	3082 (12.4)	1.7	3995 (16.2)	40.6
黒 石 市	725 (3.1)	370 (1.8)	786 (3.2)	8.4	543 (2.2)	46.5
五所川原市	847 (3.6)	690 (3.4)	836 (3.4)	△1.1	877 (3.6)	27.0

### 3. 考察

#### ① 各要素毎の割合分布よりみた三市の商店街の形態(オⅡ図参照)

それぞれの商店街における店舗を、Ⅰ買廻品店、Ⅱ最寄品店、Ⅲ娯楽飲食店、Ⅳサービス業Ⅴその他の五要素に分類し、この割合を要素毎に分布させ、三都市の商店街の店舗構成をみると、買廻品店率が30%以上が弘前市5、五所川原市3、黒石市1で、最寄品店率とは逆になっている。即ち、Ⅱでは、黒石には30%以上が約半数あり、五所川原市には、弘前市と黒石市の中間が多い。

Ⅳの娯楽飲食店は五所川原市に40%近いのがある他は、25%未満が多い。サービス業は、五所川原市・黒石市に35%近いのがあるが、全般的には、五所川原市に多く黒石市に少ない。Ⅴのその他は、Ⅱの最寄品店率と似ており、弘前市に低く、黒石市に高いのが多い。この分類の内容は、オⅡ表の如く、Ⅰは文化品、Ⅱは日用品、Ⅲは娯楽的要素、Ⅳは、散在性の理、美容から、モーター修理、病院等と、中心性を持つ銀行などである。Ⅴは、上の分類のどれにも入らない製造業・住宅・倉庫等の非店舗である。この分類によると、商店街の形態を考察する際、最も進んだ形態としてはⅠが多くなり、逆にⅡが少なくなる。そしてⅡが商店街の中に入りこんでいわゆる繁華街を構成する。Ⅳは、どちらかというと周辺に多くなり、Ⅴはそのまま少ないほど、店舗率が高いことを示しているのがわかる。

#### ② 商店街の店舗構成によるタイプ(オⅢ図)

各都市の商店街を、先の分類によった五要素の割合を五角形で表わして、その形態が似ているものをもってタイプを分類した。

— A — 買廻品店率が45%以上

A	Iが 45% 以上	a	$I+II>70\%$	<div>63.4 中上寺町(弘)</div> <div>56.2 上上寺町(弘)</div> <div>54.2 下上寺町(弘)</div> <div>48.1 横町(里)</div> <div>58.2 大町(五)</div>
		b	$III>18\%$	<div>49.1 銀座街(弘)</div> <div>45.8 一番町(弘)</div>
		c	$IV>18\%$	<div>47.5 本町(五)</div> <div>47.4 柏原町(五)</div>
B	Iが 25~40% %	a	$III>20\%$	<div>32.3 百石町(弘)</div> <div>25.0 大町(五)</div>
		b	$IV>20\%$	<div>28.1 寺町(五)</div> <div>31.4 代官町(弘)</div>
<div>I 買廻品店率 II 最寄品店率 III 娯楽飲食店率 IV サービス業率 V その他(非店舗)</div> <div><math>I+II+III+IV+V=100\%</math></div> <div></div>				
C	各要素を比較的平均	a	$I+II>III+IV$	<div>市町(黒)</div> <div>市屋町(五)</div> <div>市町(黒)</div> <div>一番町(黒)</div> <div>大町(弘)</div>
		b	$I+II<III+IV$	<div>市町(五)</div> <div>市町(弘)</div> <div>市町(弘)</div> <div>市町(弘)</div> <div>市町(弘)</div> <div>市町(弘)</div> <div>市町(弘)</div> <div>市町(弘)</div>
D	$II+V>50\%$	a	$I>15\%$	<div>市町(黒)</div> <div>市町(弘)</div> <div>市町(五)</div>
		b	$I<15\%$	<div>31.7 市町(黒)</div> <div>36.7 市町(黒)</div> <div>46.1 市町(黒)</div> <div>32.3 市町(黒)</div>

Aa 買廻品店率と最寄品店率の合計が70%以上の商店街で、弘前市の上・中・下の各土手町と、五所川原市の大町B（ロータリーから寺町境まで）黒石市の横町が該当する。これらは、都市の中心商店街であり、商店街としての景観が最も明瞭かつ専門店も多く、デパートや大型店舗も進出している。Iの要素の高さが、商店街の充実さ、繁華度を示すものである。土手町の三商店街は、それぞれ連続した通りであるにもかかわらず、その内容は、むしろそれぞれ異なっている。即ち、上土手町は、間口3.3～3.6mで、こみせを伴った小規模な衣料店

才II表 業種分類表

I 買廻品店	II 最寄品店	III 娯楽・飲食店	IV サービス業	V その他
デパート・各種商品販売業・衣料品店・はきもの店・貴金属メガネ・時計店・楽器店・玩具・スポーツ・書籍・文具・印舗・茶舗・室内装飾品・手芸材料・服地・化粧品・薬・小間物・仏具・家具・電化製品などの販売店	スーパーマーケット 食品・雑貨 お菓子・金物 陶品・建材 肥料・燃料 袋・自転車 オートバイなどの販売店	喫茶店・寿司 ソバ等の各種料理店・レストラン・酒場・旅館 キャバレー パチンコ・映画館 各種遊戯場	理・美容院 公衆浴場・クリーニング モーター修理 タクシー・運送 質屋・銀行・ブレイガイド・塗装・写真館・石油スタンド・洋服仕立て・病・医院・生命会社 弁護士・貸本屋	各種工場 会社・事務所 公官庁・住宅 問屋・卸屋 倉庫・車庫 学校・学院 建築中

才III表 三市の中心商店街

都市の中心商店街	全長	幅員	店舗数	平均売場奥行	平均売場間口	奥行間口	買廻品店	高級買廻品店	非店舗	分類
弘前市 中土手町	360m	8m	93	9.7m	6.5m	1.5	59(63.4)	9(10.2)	3(3.2)	Aa
" 下土手町		8m	48	13.0	8.5	1.5	26(54.2)	4(9.0)	3(6.3)	Aa
五所川原市 大町	450m	15m	94	8.8	7.5	1.2	43(45.8)	6(6.2)	3(3.2)	Ab
大町B	250m	15m	55	9.5	6.6	1.4	32(58.2)	4(7.3)	2(3.6)	Aa
黒石市 横町	270m	6m	52	7.0	7.0	1.0	25(48.1)	2(3.8)	5(9.6)	Aa

注 ① 店舗数は、一店一営業を、即ち二階以上の異なった営業は、それも一店と数えたので軒数と店数とは必ずしも一致しない。

② 高級買廻品店とは、中心商店街に集中する傾向のある容積のわりに高価な商品例えば、時計・宝石・楽器・カメラなどを専門に販売する小売店をさす。

が30店のうち20店もあり、中土手町・下土手町の衣料品店とは異なっている。又、買廻品のうち、靴・スポーツ用品・玩具店などが殆んどなくAaタイプの中でも低次の方である。中土手町は、弘前市の中心を形成し、その路線地価の最高もこの通りの中にあり、アーケード設備により店並みが整い、いわゆるShopping Streetの典型的なものとみられる。買廻品店率が63.4%と全商店街中、最高を示し、衣料品店19、靴、かばん類店9、貴金属・時計・楽器・カメラ等の高級買廻品店9でこれも三市の全商店街中最高の店数を数える(オ1表)

下土手町は、最寄品店率がAaの中では最低で、娯楽飲食店と銀行等のサービス業が共に10.4%で、やや高率である。ここは、近年とみに大型店舗の増改築が頻繁に行なわれ、又店舗構成の変化が著しく、金融機関の進出もこれに拍車をかけ、弘前市の中心を形成しつつあり、中土手町の二次的商店街というよりは、はっきりと中心が延長したと見る事ができる。大型店舗が多いことは、中土手町の平均間口が6mに対し、下土手町は8.5mであり、10m以上の店舗は、店あることでも判る。五所川原市の大町Bは、店舗構成は、中土手町と殆んど似ており、五所川原市の中心商店街といえる。黒石市の横町は、その店舗構成はAaタイプに入り、黒石市の中心商店街となっているが、市街地人口が20%で8800人程度であることにもよるだろうが、土手町や大町Bとは、内容においては、かなり差がある。旧式の木造店舗で軒が低く店並みも不ぞろいである。中には近代的な大型店もあるが、それは、わずか1店である。高級買廻品店率は3.8%しかなく、洋呉服店が多く、これが1要素を高めたゆえんであり、全般的には、未だ都市的中心商店街にまで至っていない。

Ab:娯楽飲食店率が18%以上の商店街、弘前市の銀座街、一番町が入るだけである。これは都市規模の違いがはっきり表われている。

Ac:サービス業率が18%以上の商店街、五所川原市の本町・柏原町が入る。これは、中心商店街との交差点で、周辺の色彩がAa、Abに比べ、強く、五所川原市の二次的商店街とみてよい。柏原町は店舗数23軒で通りの長さも短かく本町の延長とみてよい。

-B- 買廻品店率が30~40%の商店街

Ba:娯楽飲食店率が20%以上の商店街、これには、弘前市の百石町と五所川原市の大町a(駅よりロータリーまで)が入り、娯楽的要素が強い。百石町は、映画館・パチンコ店・喫茶店・飲食店が20店、大町aは15店ある。大町aは駅前商店街でもあり、五所川原市の交通機能の強さが表われている。

Bb:サービス業率が20%以上の商店街、五所川原市寺町、弘前市の代官町がこれである。これは、AグループやBaに比べると、店舗の切断が多く、商店としてはやや劣る。いづれも中心商店街に続いている。

-C- 五要素の割合が比較的平均している商店街

C a : 買廻品店と最寄品店の合計が娯楽飲食、サービス業より多い商店街である。これは端的には比較的小売店が多いといえる。黒石市の内町・上町・一番町が入り、横町を除く商店街は、CかDに集中しているのがわかる。五所川原市布屋町a、弘前市大町もこのタイプでこれらはAあるいはBの外側に達している。

C b : C aの場合と逆に、小売店が比較的低く、娯楽飲食サービス業率が高い商店街、C aよりは周辺的性格が強く、弘前市と黒石市の駅通りがこのタイプで五所川原市の駅通りである大町aとは異なり低次の商店街といえる。弘前市の駅通りは、駅付近を除くと交通関係のサービス業が広い間口を占め、商店街に発達していない。

- D - 最寄品店率と非店舗率の合計が50%以上の商店街

D a : 買廻品店が18%以上の商店街、黒石市前町、弘前市松森町、五所川原市新町が、このタイプであり、肥料・農機具・修理業・工場や倉庫などが多く、農村へのサービスの機能を有し、Cの外側、即ち市街地の末端にあたっている。

D b : 買廻品店率が18%以下の商店街、黒石市山形町・仲町・浜ノ町がこれにあたり、もっとも周辺的性格を持ち、商店街としての機能も甚々弱く、この分類においては、最も低次の商店街である。黒石市の市街の外縁部に位置している。

#### < まとめ >

都市規模のはるかに異なる弘前市と、ほぼ同規模の五所川原市、黒石市の商店街の店舗構成は弘前市にA・Bが多く、黒石市はC・Dが殆んどであり、商店街としては低次のものが多いが、五所川原市は、むしろ弘前市に近く、A・Bも多い。これは、五所川原市の商店街の繁栄と充実を示しており、一方、黒石市の商店街の未発達さが示している。それは三市の中心商店街においても顕著に著われており、五所川原市の大町bは、弘前市の中土手に匹敵する専門店率であるが、横町は、中心商店街としては専門店率も低く(20.6%)店舗の内容は旧式が多く近代的なものが少なく、機能上からも形態上からも不十分であり、弱い。駅前商店街は、弘前・黒石とも、どちらかといえば商店街としては弱く、低次のものに対し、五所川原市は、メインストリートでもあり、繁華街となっている。これは、五所川原市のもつ交通機能の強さ、ひいては、西北都を中心としてその商圈をおさえている位置的な有利さなどによるものと思われる。又、五所川原市のメインストリートの道巾が広く、アーケード設備による新しい近代的な店舗が多いのは、火災も原因しているであろう。黒石市はヒンターランドの限られた立地条件、そして弘前市との交通の便の良さが、黒石市独自の広い商圈を持てず、商店街の未発達さを表わしていると思われる。弘前市は三市のうち都市規模に相応し、もっとも充実している。

終り

参考文献および参考資料

- ・杉村 暢三（１９６５）：「商店街の調査方法－中心商店街の実態調査から－」地理 Vol 10 No 1
- ・杉村 暢三（１９５８）：「日本の都市の中心商店街とその店舗」地学雑誌 Vol 67 No 4
- ・杉村 暢三（１９５５）：「本那諸都市における中心商店街の比較研究」地評 Vol 28 No 12
- ・杉村 暢三（１９６５）：「中心商店街の性格と考察」地理 Vol 11 No 10
- ・山鹿 誠次（１９６４）：「都市調査法」古今書院
- ・横山 弘・水野 裕（１９６５）：「青森県内の主要都市圏について」弘前大学教育学部紀要 15号
- ・弘 前 市（１９６６）：「弘前市商業の現状に関する問題点」商工課資料 137
- ・弘 前 市（１９６６）：市勢要覧
- ・黒 石 市（１９６６）：市勢要覧
- ・五所川原市（１９６６）：市勢要覧
- ・青 森 県（１９６６）：才9次（昭和41年度版）青森県経済白書